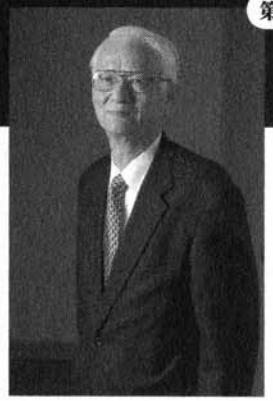
言葉になる理屈は単純がゆえに、会議室で勝つ。だから行動を間違える。



ドラッカー学会代表　上田惇生先生:1938年埼玉県生まれ。生前のドラッカーとも親交が厚く、『マネジメント』を始めとするドラッカー主要著作の全てを翻訳している。著書に『ドラッカー入門』『ドラッカー　時代を超える言葉』(ともにダイヤモンド社刊)がある。

「理屈」と「知覚」は両立すべきもの

岩崎：僕が感じるドラッカーの魅力は、まず言葉の一つ一つが警句として、強く心に刺さってくるところですね。あとは、合理的な部分と感覚的なものが、両方を補いながら循環しているというか。

上田：そこが日本人にはぴったりなんだな。つまり、ばらばらに分解して、組み立て直して色々足していけばいいものができるという、そういう考え方が間違いだってことが、いわゆる右脳でわかっちゃうのが日本人なんだよね。で、ドラッカーの考え方も、まさにそういうことで。これまで、理屈理屈で全て解決できると思っていたが、これからの時代はそうではない。資源、環境、エネルギー、教育、そういった問題は全て理屈だけではうまくいかないんですよ。それを超えた何かがあるんだっていう。「我思う、ゆえに我あり」では足りないんだというね。デカルトは、理屈で全部わかると言ったけれども、いやそれだけじゃないと言ったのがドラッカー。だから両者は並び得る存在なんだけれども、それがわかるのは日本人だけだと思うんですよね。西洋人はまだわかっていない。彼らも全体を見るのが大切だということはわかっているけれども、21世紀は理屈だけじゃ足りないってことを、一番理解しているのは日本人だと思いますね。だからと言って、理屈がダメって言いすぎるのも危険なこと。やっぱり理屈が文明をここまで持ってきたんだから。デカルト以来の近代合理主義っていうのは、科学を生み、産業を生んで、世の中を進歩させているんですよ。

岩崎：そこを完全に否定してはだめですね。両者は歯車の車輪のように、一体のものということでしょうか。

上田：ドラッカー自身は、保守的な保守主義者とか、革新的な革新主義者には絶対なり得ないと言っているんですよね。保守的な革新家であるか、革新的な保守家であるか、それにはなるっていう。常に両方を持っているのね。その二つは対立するものじゃなくて、両立するもの。北極と南極みたいなもので、両方ある。だからある人たちには生ぬるいって言われる。でも、生ぬるいところに真理があるんですよね。そういう種類の、全てのものを生き物のように見るっていうのは、言葉になりにくいんですよ。結局ドラッカーのすごさにしても、「もしドラ」の良さにしても、言葉にならない世界なんですね。だから理解されるまでに時間がかかっちゃう。だいたい言葉にできるやつっていうのは、単細胞だからね。金儲け一生懸命やるだけなら、できるのは当たり前っていうのと同じでね、簡単なんですよ。だから会議室でそっちが勝つの。だから行動を間違うの。必ず会議室ではね、そっち行っちゃうんですよね。理屈でみんなが一致した時は危険なの。向こう側の景色を見てないんだから。

新製品に対する最高のほめ言葉とは

岩崎：非常に残念ですが、そろそろお時間が迫ってきました。最後に「もしドラ」の読者にメッセージをお願いします。

上田：これ最高！この漫画を読む人は、読まない人よりも一歩先を行くと思うよ。言っていることは間違いない！それでいて面白さは保証付きっていう、奇跡的な話なんですよ。ドラッカーも言ってるの。新製品でね、みんなに受け入れられるような製品が開発された時に、最高のほめ言葉は「なんで俺はこれに気がつかなかったんだ」ですから。それがみんなが求めているものなんですよ。この「もしドラ」もそうだから。うれしくなっちゃうね。それで漫画を読んで、小説も読んで、その教科書になった本も読めば、俺たちでいい会社を作ろうよってなるんだよ。実際にそれでアメリカ一の会社になってるところがあるんだから。日本でもどんどんそういうことが起こっていけばこんなに素晴らしいことはないね。

岩崎：上田先生、ありがとうございました！